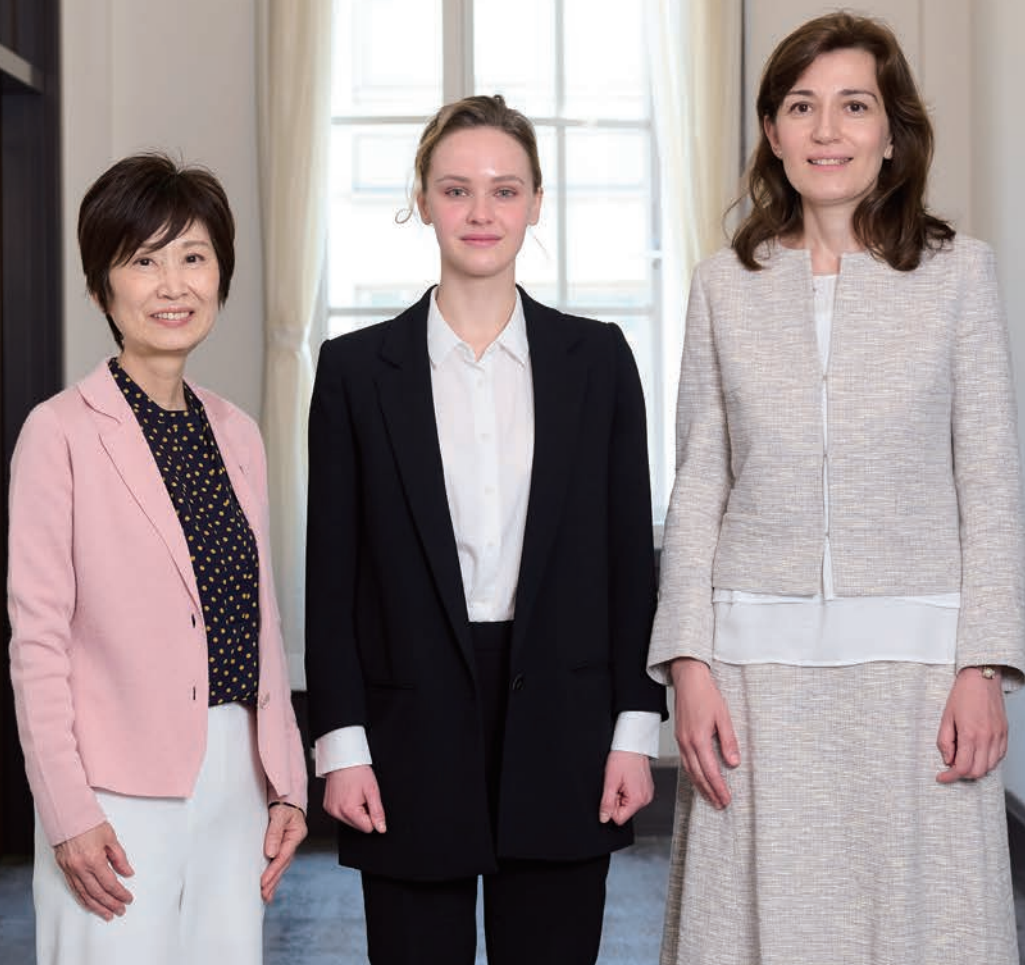


# 京都大学での学びと出会いが 新たな道を切り拓いてくれた

外交官をめざして京都大学法学部に入学したウクライナ人留学生のアンナさん。国際法などを勉強していたが、米国留学で「社会起業」を知り人生の転機を迎える。社会起業家という新たな夢を得て、学部生の時に女性のメンタルケアサービスを手がける会社を立ち上げた。そして今また、会社で培った人脈を活かしてウクライナ支援を行っている。アンナさんの指導教員でご自身はトルコ出身、国際経営を専門とし日本企業の社外役員も務めるチョルパン先生と男女共同参画を担当する稲垣理事・副学長を交え、京都大学の印象、ダイバーシティやウクライナ支援など、幅広いテーマで話し合っていた。 (鼎談実施日:2022年5月24日)



京都大学理事・副学長

**稲垣 恭子**

広島県出身。京都大学教育学部教育社会学科卒業、同大学大学院教育学研究科博士課程退学。滋賀大学教育学部助教授、京都大学教育学研究科教授、放送大学客員教授などを経て2017年に京都大学教育学研究科長・教育学部長に就任。2020年10月より現職。著書に『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』（中公新書）などがある。

京都大学経営管理大学院専門職学位課程

**アンナ・クレシェンコ**

ウクライナ・オデーサ出身。2015～2017年ウクライナ政府の優秀な学業成績賞の受賞者。オデーサ国立大学社会科学部国際関係専攻 学士課程修了。文部科学省国費留学生として2017年来日、予備教育を経て2018年より京都大学法学部に入学。2020年12月にFlora株式会社を設立。2022年4月京都大学経営管理大学院入学。

京都大学経営管理大学院教授

**アスリ・チョルパン**

トルコ・イズミル出身。英リーズ大学経営工学修士、京都工芸繊維大学工学博士。京都大学経済研究所と同志社大学技術・企業・国際競争力研究センターで研究員を歴任。京都大学白眉センター准教授。ハーバード・ビジネス・スクールおよびMIT客員教授。2018年より現職。

## 寛容さの中で 「なりたい自分」をめざして

**稲垣** 今日は本学で学ぶウクライナ人留学生であるアンナさんと、その指導教員であるチョルパン先生にお話を伺いたいと思います。まずはアンナさんの現在の学生生活について教えてください。

**アンナ** 経営やベンチャー業界のことをもっと勉強するために、今年4月から京都大学経営管理大学院に進学しました。留学生や女子学生が多く多様性のあるコースに所属していますが、アクティブな人ばかりで、月に数回は何かしらの集まりがあります。とても充実した日々を過ごしています。

**稲垣** チョルパン先生から見て、アンナさんはどんな学生ですか。

**チョルパン** パッションとバイタリティのある学生ですね。経営戦略やMBAプロジェクトなどを指導していますが、課題や自分の研究テーマについて非常にやる気をもって取り組んでいる姿が印象的です。

**稲垣** チョルパン先生ご自身も留学生として来日され、京都大学へは最初、研究員として着任されています。京都大学の印象はどのようなものでしたか。

**チョルパン** 私が来日したのはもう20年以上も前になりますが、日本で研究するなら京都大学だ、と思っていましたね。プレッシャーを感じることなく、自分の研究テーマを自由に決めて研究に打ち込める環境は楽しかったし、楽しいからやる気も出るし、成果もあげられるのだと思います。

**アンナ** 日本で女性外国人研究者として活躍されているチョルパン先生は憧れの存在です。

**稲垣** アンナさんが文部科学省の国費留学生として来日された時、いくつか選択肢があったと思いますが、なぜ京都大学を選ばれたのでしょうか。

**アンナ** 「外交官になって国際的に活躍したい。そのために国際法を勉強しよう」と思っていた私にとって、教育レベルが高いというイメージだった日本は理想的な留学先でした。学部は法学部、大学は東京か京都の二択でしたが、決め手となったのは京都大学の自由の学風です。

**稲垣** どんな“自由”を想像していたのですか。

**アンナ** 官僚を多く輩出する東京大学はきっちり決められた学びなのに対し、京都大学は周囲を気にせず好きなことを学べる、と勝手なイメージを抱いて

いました。実際、京都大学法学部ではほとんど必須科目がなくて好きな科目を自由に組み立てることができ、京都大学を選んでよかったと思いました。

しかも、住んでみたら京都の町も気に入りました。自然に囲まれていて、ストレスがたまった時は鴨川を散歩してリフレッシュしています。

**稲垣** 京都大学の印象や、京都大学での学びはいかがでしたか。

**アンナ** まず驚いたのは、勉強だけでなく、スポーツや芸術、社会活動などさまざまなことに興味を持ってチャレンジしている学生たちがたくさんいたことです。そのことが刺激になって、自分も何かに挑戦しようという気持ちになりました。

学びについては、教養・共通科目が好きでした。とくに宗教学や論理学、中国文字文化論が印象的で、授業でとったメモを今も大切に保管しているほど。専門の国際法の勉強にも一生懸命取り組み、国際法学会のメンバーと参加したジュサップ国際法模擬裁判大会2020では最優秀賞を受賞しました。

**稲垣** 幅広く貪欲に学ばれたわけですね。ウクライナの大学との違いを感じるころはありましたか。

**アンナ** ウクライナの教育はディスカッションを重視する傾向があります。一方の京都大学は幅広い領域を横断、融合した知識や教養を育てることを大切にしていると感じます。両方を学べたことは貴重な経験です。

京都大学で学ぶうちに思ったのですが、自由の学風とは、「なりたい自分になれる自由」とでも言うような、「寛容さ」こそが要(かなめ)なのではないか、ということでした。法学が専門でありながら、米国留学をしてシリコンバレーに見学に行ったり、ビジネスコンペティションに参加したり、興味の赴くまま自由に学びチャレンジすることができた。それが、社会起業家という今につながっています。

## 米国への留学経験をきっかけに 社会起業家の道へ

**稲垣** 社会起業として、2020年に周産期メンタル



に関する事業を展開する会社を立ち上げておられますね。外交官をめざして国際法を勉強していたアンナさんが起業されたのは、どのような経緯があったのでしょうか。

**アンナ** きっかけは1回生の終わりに米国短期留学プログラム「Kingfisher Global Leadership Program (以下、Kingfisher Program)」に参加したことでした。久能祐子先生(京都大学工学研究科博士課程修了。現・国際渉外、海外同窓会担当理事)とワシントン DC 京都大学同窓会の支援を受けて企画され、ワシントン D.C. の各種機関や現地企業・財団で働くプロフェッショナルによる講義やディスカッションに参加するというプログラムです。

プログラムの中で久能先生の講義を聴き、社会起業と呼ばれる概念を知った時は衝撃でした。社会問題の解決を目的として収益事業を起こすという考え方で、久能先生ご自身バイオベンチャーを2つ立ち上げ、今また社会起業家を支援する財団のトップとして社会貢献に力を入れています。以来、久能先生が私にとってのロールモデルとなり、ビジネスを通して社会貢献することが目標になりました。夢は外交官から社会起業家へ。まさに人生の転換点でした。

**稲垣** アンナさんの参加報告書を拝見しましたが、「社会問題の解決を国に任せるのではなく起業によって変える」という考え方に感銘を受けたことが伝わってきました。社会起業家に必要な資質についても述べられていますね。

**アンナ** 表現が正しいのかわかりませんが、大切なのは「根性」だと考えています。コツコツやり通す力とも言える根性は、日本人の特徴的な一つの性格だと思っています。私も日本に来て根性がついたと感じています。

**チョルパン** たしかに「頑張る」というのは、日本でしか聞かない言葉です。英語にもトルコ語にもありません。

**稲垣** 「努力する」という意味に近いかもしれませんが、日本は努力主義の傾向がありますから。

**アンナ** もちろん根性だけではイノベーションを起こせません。好



奇心を持ちながら、根気強く、決断力や行動力をもって取り組まなければなりません。

**稲垣** 根性の必要性は、実は重要なご指摘です。最近の日本の教育現場では努力主義よりも個性を大切にしている傾向が強くなり、失敗を回避することが重視されがちです。でも、肝心なのは失敗したあと。粘り強くアタックしたり、方法を変えたりして、失敗を乗り越える経験こそが人間の成長につながります。ですから、学生には失敗を恐れずチャレンジしていただきたい。海外留学は絶好のチャンスだし、アンナさんのような留学生や起業家の方から日本人学生が学ぶことも多いと思います。

## 自らの強みを活かした ウクライナへの支援を

**アンナ** 事業内容を周産期メンタルケアとしたのは、私のいとこが妊娠中に心身の不調をきたしたことがあり、妊娠中のメンタルケアは重要でありながら未開拓で課題の多い領域であることを知ったからです。生体工学が専門のウクライナ出身者と共同創業し、生体データを計測する技術などを活用したアプリ開発を手がけています。

**稲垣** アプリ開発にあたって、ウクライナのエンジニアに業務委託をされており、そこで培った人脈を活かして、ウクライナの IT 人材への就労支援を始められたとか。

**アンナ** 大阪の IT 関連会社が企業から Web 制作やプログラム作成の発注を募り、私が自身の人脈を駆使して避難民に紹介する仕組みです。ウクライナの優秀な IT 人材に対して仕事という形で支援することができ、長期的な支援につながる可能性があると考えています。

**稲垣** 日本でできる支援の選択肢には限りがある中での新たな支援の形ですね。

**アンナ** 自分ができることを見つけ、大きな貢献できないとしても、なんらかの形で自国の人たちの助けにつながればうれしいです。

**稲垣** 自分の強みをきちんと自覚して支援につながっているすばらしい例だと思います。

京都大学でもウクライナの大学から学生受け入れを進めていますが、こうした支援をどう捉えていますか。

**アンナ** 多くの方々からの心のこもった言葉やアク

ションに励まされましたし、私も社会起業家としてサステナブルな社会貢献をしたいと強く思いました。寄付や支援に限らず継続的な関係づくりができるよう、そして互いのメリットとなる取り組みを考えていきたいです。

**稲垣** 日本で学ぶことで、アンナさんのように日本とウクライナの間を深めてくれる人材が生まれるかもしれません。日本人学生にとっても、欧州の歴史や地政学などを理解するチャンスになるでしょう。教育・研究交流を通して、ウクライナの学生にもぜひ京都大学の自由の学風の中で学んでいただきたいと考えています。

**アンナ** 非常にありがたいです。ウクライナが強い分野、弱い分野、それぞれを見極めたうえで適切な支援をお願いできればと思います。

**稲垣** ウクライナという国への正しい理解のもとで、支援の方法を考えることが大切ですね。

## 京都大学のこれからのダイバーシティ

**稲垣** せっかくこのメンバーがそろっていますから、ダイバーシティについて少し触れましょう。京都大学はまだまだジェンダー平等が進んでおらず、女性教員比率は旧七帝大の中で最下位、今年5月時点で13%、他大学は16%程度です。この比率を上昇させるべく、今春から女性理事を増員し、学部や大学院ごとに数値目標を設定するなど、ダイバーシティ推進に向けて取り組みを行っているところです。

お2人はダイバーシティが進まない理由をどう思われますか。

**チョルパン** 一番の理由は、ダイバーシティの取り組みを担うべき執行部そのもののダイバーシティが進んでいないことだと思います。とくに学部や大学院の執行部は顕著です。つくづく実感しているのは、日本人男性ばかりの執行部では女性や外国人の気持ちがわからない、だから何も変えられない、ということです。私が教授会の終了時間を17時へと変更するよう働きかけた時も、なかなか進まず苦勞したことがありました。

投資家からのプレッシャーによってダイバーシティに取り組んでいる企業に対して、大学はプレッシャーがゆるい、あるいは感じていない

ことも理由だと思います。

数値目標についてはメリットがありますが、デメリットも大きいと考えています。女性や外国人教員を特定助教などに据えて数字合わせをしてしまいがちではないでしょうか。

**稲垣** おっしゃるとおりだと思います。数字の問題だけを解消するのではなく、定員内教員で教授率を上げるとともに、特定で採用された研究者を定員内教員に昇格するルートをつくる必要があります。

**チョルパン** 同じ文化や価値観を共有する人たちだけが集まる同質性の高い場から、新しいものは生まれません。多様な立場の人が集まってこそ新しい意見が出てくるはずですから、ぜひそういう視点で取り組んでいただきたいと思います。

**稲垣** アンナさんは女性かつ起業家の視点からいかがでしょうか。マスコミが若い女性起業家を取り上げるからなのか、増えている印象があるのですが。

**アンナ** いえ、それほど多くありません。起業家の80%ほどが理系の教育を受けていること、IT分野の起業が多いことを考えると、そもそも理系分野に女性が少ないのですから当然ですね。

起業してからもいろいろな壁があると感じます。周産期メンタルケアという事業を説明するにしても、投資家や管理職のほとんどが男性で、課題そのものが理解されません。

**チョルパン** 私がゼミを担当した女性卒業生には起業した人もいますが、その理由に驚きました。大企業に入っても女性は昇進できないから自分で何とかする、と。起業する人が増えることはある面ではプラスでしょうが、女性だから昇進できない企業がある、またはそう認識されている、ということが問題です。

**稲垣** 日本の社会はあからさまな格差や壁はないけれど、見えない壁が何重にもあって、一つずつ破っていくのは大変なことです。

京都大学は今後、性差分析に基づく研究開発をめざすジェンダード・イノベーションにも取り組まなければいけないと考えています。意識や組織の改革だけでなく、テックなどさまざまなレベルでダイ



バーシティへの取り組みが進む中で、京都大学は遅れることがないようにしなければなりません。

## 次世代のロールモデルに

**稲垣** 今後についてはどのように考えているのでしょうか。

**アンナ** さらに勉強を積んで、社会起業家として活躍し続けたいと思っています。

**稲垣** ずっと日本で、ですか？

**アンナ** それはわかりません。目下の目標は上場ですが、また別の国に行くかもしれません。

**稲垣** 今のビジネスを成功させることを優先して、その後は新たな活躍の場を探されるわけですね。

**アンナ** 日本でほかの課題を見つけて取り組むかもしれません。いずれにしろ、新しいことを

やっていきたいです。

**稲垣** 頼もしい限りです。今度はアンナさん自身が次世代の人たちのロールモデルになっていただきたいです。

**アンナ** 頑張ります。

**稲垣** 最後に、これから京都大学で学ばれるウクライナ人学生へのメッセージをお願いします。

**アンナ** 自分のやりたいことを見つけて努力を続けてください。壁はもちろんありますが、乗り越えられない壁はありません。やり抜く力、行動力があれば日本でも成功できるはずですよ。何事も根性。私自身、そういう事例をつくっていきたいと思います

**稲垣** ウクライナ人学生の受け入れはすでに始まっています。根性のある人たちを、京都大学はぜひ全力で応援したいと思います。本日はどうもありがとうございました。

